

[芸術教育記録]

## 2012年度パフォーミング・アーツ学科一年生宿泊研修報告

### 2012 Report on the Performing Arts Field Trip Seminar for the First Year Students

小佐野圭\* 松村悠実子\*\*

Kei Osano and Yumiko Matsumura

#### はじめに

本学部パフォーミング・アーツ学科では、例年4月の入学直後に、始業ガイダンスを目的とした一年生宿泊研修を行っていたが、今年度は新たな試みとして、9月に日程を変更し、その目的を「パフォーミング・アーツとは何か」という4年間の自分の専門分野について考えることに重点を置いた研修を行った。またその内容も宿泊研修という形を生かし普段の教室の授業ではできない、パフォーミング・アーツ学科の大きな二つの柱：「演劇」と「音楽」に触れられる様、1日目には「狂言」と「バイオリンとピアノの演奏会」の鑑賞を行い、また2日目には、前日の観劇・鑑賞を踏まえて、グループディスカッションを行い、「パフォーミング・アーツとは何か」を議題として話し合った。最後にはこの研修を踏まえ「パフォーミング・アーツとは何か」というタイトルでレポートを書いて、研修のまとめとした。

#### 研修概要

研修の概要は以下の通りである。

目的：日本古典芸能の知識を得ると同時に、横浜能楽堂の舞台に立つという体験を通して、芸術空間を体感すること。また、演奏会を通して、バイオリン及びピアノ演奏を鑑賞し、作曲家・作品の本質に触れること。さらにはこの二つの公演を通して、「パフォーミング・アーツとは何か」について考えること。

到達目標：芸術への意識と価値観を高め、今後、自らの学習へ意欲を示すことができる。

評価：研修2日目において、グループディスカッションを行う。「パフォーミング・アーツとは何か」というテーマで議論をする。最終的には各自がレポートをまとめ、内容を検証する。

---

所属：\* 玉川大学芸術学部教授  
\*\* 玉川大学芸術学部助教

受領日 2012年11月30日

引率教員：学科主任：太宰久夫/担任：小佐野圭、松村悠実子、松川 儒、馬場眞二、佐藤由紀/教務担当：中村岩城/助手：須藤未来、都甲英里

実施内容：狂言師 茂山あきら氏（ほか4名）を招聘し、横浜能楽堂にて『附子』『濯ぎ川』の公演を観劇する。また、バックステージツアーを行い、舞台に立つなど、身体を通して現場を学ぶ。夜は「サロンコンサート」と題し、卒業生のピアニスト金子奈津子氏&バイオリニスト原徳子氏を招聘し、演奏会を行う。演奏曲目はモーツァルト、メトネル、ファリア等の作品を演奏する。2日目には、佐藤由紀指導のもと、グループワークを通して二つの演目の共通点を探り、「パフォーミング・アーツとは何か」について自分の考えをまとめレポートにする。

日 時：平成24年9月18日（火）～19日（水）

場 所：観劇：横浜能楽堂 鑑賞：ローズホテル横浜

宿 泊：ローズホテル横浜

参加者：平成24年度 パフォーミング・アーツ学科 1年生

## 演目内容

### ① 狂言

日時：2012年9月18日（火）開演13時半 場所：横浜能楽堂

出演：「附子」 太郎冠者：茂山逸平 次郎冠者：茂山童司 主人：増田浩紀  
「濯ぎ川」 夫：茂山あきら 女房：増田浩紀 姑：丸石やすし

1. はじめに （太宰久夫）
2. 解説 （茂山あきら氏）
3. 「附子」  
休憩（10分）
4. 「濯ぎ川」
5. バックステージツアー

### ② サロンコンサート ～音楽の贈り物～

日時：2012年9月18日（火）開演20時 場所：ローズホテル横浜内ホール

演奏：(Pf) 金子奈津子氏 & (Vn) 原 徳子氏

1. 金子奈津子 氏  
モーツァルト 《ピアノ・ソナタ 第17番》K. 576 第1、3楽章  
*Mozart, Wolfgang Amadeus* Piano Sonata No. 17 D major K. 576-1<sup>st</sup> & 3<sup>rd</sup> movements
2. 原 徳子 氏  
クライスラー 《シシリアーナとりゴードン》  
*Fritz Kreisler* Scilienne And Rigaudon  
ファリャ 《スペイン舞曲》

Manuel de Falla y Matheu, *Danse espagnole de “La vida breve”* for Violin and Piano

### 3. 金子奈津子 氏

アレンスキー 《6つの小品》作品5より「プレリュード」「マズルカ」  
*Arensky, Stepanovich Six Pieces Op. 5-Préludes, Mazurka*

メトネル 《4つのおとぎ話》作品34より第2曲  
*Medtner, Karlovich Nikorai 4 Fairy Tales Op. 34-No. 2 E minor*

### 研修スケジュール

日付	時間	場所	
9月18日（火）	12：30	横浜能楽堂	横浜能楽堂 集合
	13：30		〈研修Ⅰ〉 「狂言 観劇」「バックステージツアー」
	17：00		終了後、各自ホテルへ移動
	18：30	ローズホテル横浜	夕食
	20：00		〈研修Ⅱ〉 「サロンコンサート 鑑賞」
			〈研修Ⅲ〉 質疑応答タイム：学生&出演者&教職員
	22：00		就寝
9月19日（水）	7：30	ローズホテル横浜	朝食（各自）
	9：30		〈研修Ⅳ〉 グループワーク「今回の研修を受けて考察すること」 担当：佐藤由紀 グループディスカッション レポート：「パフォーミング・アーツとは何か」 学科主任からのお話 質疑応答タイム：学生&教職員
	11：30		解散

### 学生レポート「パフォーミング・アーツとは何か」より

- ・今回のディスカッションでは狂言と音楽の演奏という一見全く違う様に思える二つからいろいろな共通点が発見された。表現のためのツールや伝えたいことは様々でも「人に伝える」ということは共通していると思う。どのような手段をつかってパフォーミング・アーツとは「伝えること」「見ってもらうこと」ということとは切り離せないと思う。
- ・私はパフォーミング・アーツには舞台が必要不可欠なものであると確信した。演劇・舞踊・音楽など各々に適し、各々にさらなる効果を加える場が、パフォーミング・アーツには必要なのである。
- ・パフォーミング・アーツとは「自由」だ。つまり個人個人が一番輝ける舞台なのだ。固定概念にとらわれずその場の空気や視覚的あるいは聴覚、すべての五感を通して感じたことを表現することが

重要だ。

- ・二つの研修で共通することは、「自分で動いて表現する」ということだ。ただセリフを読むだけじゃ伝わらない、ただ曲を仕上げるだけじゃ伝わらない、そこに「相手にどう伝えるか」を加えることが大事だと思う。その動作が、真の「パフォーミング・アーツ」だと私は思う。
- ・今回この二つのパフォーマンスには、すべてのことに「表現」という言葉が関連してくると思う。また「表現」という一つのくくりの中にも「表現者」と「表現場」という二つがあると思う。普段表現をする者ばかり意識しがちであったが、舞台や装置なども表現する場となっているのだと改めて感じた。
- ・パフォーミング・アーツとは、表現者は役者だけではなく、照明・道具・音響なども表現者であり、昔から伝わってきたことや新しく考えられていることを組み合わせられて創られてきた。これをパフォーミング・アーツなのだと考える。
- ・パフォーミング・アーツとは、第一に「表現」なのではないかと考える。「表現」の仕方は、人によって違う。一人一人が別の「表現」をしていくからこそ芸術は楽しい。同じ考えをもつ人は少ない。しかし、考えを共有することはできる。
- ・狂言や演奏会に触れ改めて自分が大学でこれから学ぶことは何なのかを考える機会を得た。芸術とは幅の広いものであり、人間こそ芸術のかたまりではないか、つまり原点はすべて芸術なのではないかと考えた。4年間の中で本当に自分がやりたいことは何かを探していきたい。
- ・パフォーミング・アーツとは「生きる芸術である」と私は考える。パフォーミング・アーツの最終目標は観客に見て頂きその心を動かすことだと考える。どんな芝居も演奏も一度として同じものは絶対にありえない。二度と同じものがないというところに私はパフォーミング・アーツの魅力を感じる。

## 終わりに

新しい試みとして行われた研修であり、学生の2日間の様子や、まとめのレポートから、意義のある充実した研修であったということが読み取ることができた。特に鑑賞だけで終わるのではなく、それをもとにしたグループディスカッションを行うことでより深くパフォーミング・アーツという芸術を考えることができ、芸術を理論と実践の両方から学ぶという、本学科の教育方針を学生達が体感できるプログラムであった。

またその後のディスカッションとレポートも演目に関するだけでなく、バックステージに関する考察も多く、舞台装置や照明、衣装（裳）についてもパフォーミング・アーツの重要なファクターだという見解が多く見られた。これは、茂山あきら氏のバックステージツアーをはじめ、春学期でのバックステージを学ぶ科目の学習の積み重ねと感じられ、演じる側とバックステージ側の両方の立場、そして理論と実践と、という多岐にわたる視点から考察するこの学科での学びのよきファーストステップと受け取れる。

まとめとして、1年次に研修という形でパフォーミング・アーツについてじっくりと向き合うことは、この先の学習において大変意味のあるものだと感じた。来年度以降も体系的な4年間の学習のステップとしての研修になる様、今年度に生かし考えていく必要がある。